



加賀見 俊夫

オリエンタルランド
取締役会長兼CEO



「本物」を追求して
— フィヨルド訪問で再確認 —

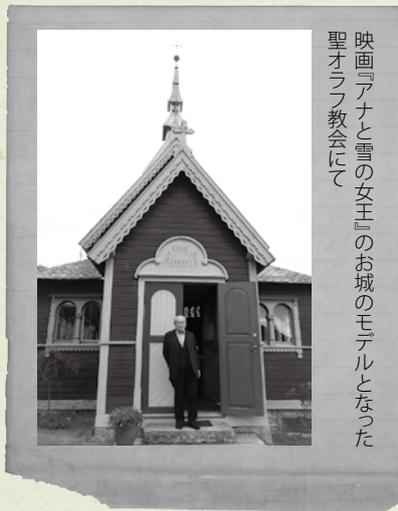
今でも年に一度は、海外視察へ出向く。最近印象的だったのは、2015年に訪れたノルウェーのフィヨルド。氷河による浸食で岩山が削られて形成された入り江だ。ここを訪れたのは、ノルウェーの大自然を舞台に、代表曲「レット・イット・ゴー」の音楽で大ヒットした映画『アナと雪の女王』を中心とした北欧エリアの開発を東京ディズニーシー（TDS）で検討していたためだ。

訪れたソグネ・フィヨルドは、周囲を囲む岩山の標高が約1,000メートル、入り江の水深は800メートル超あり、高低差



ノルウェーの世界遺産ソグネ・フィヨルドにて

が2,000メートルほどにもなる。果たして、この壮大な自然美の世界観をTDSに創れるのか。ましてや、誰もが知る映画、下手なものを創ってはゲストの期待を裏切る。テーマパークの本質は、いかにゲストを映画やその舞台背景の世界観に誘えるかだ。しかしその後、対外発表済みであった北欧計画は、開発方針を変更するという苦渋の決断に至った。



映画『アナと雪の女王』のお城のモデルとなった
聖オラフ教会にて

思い返せば、TDSの開発に際しては南欧を巡った。イタリア等地中海方面へ訪れたことのある方は、TDSにどこかノスタルジーを感じられるのではないかと聞くこともある。それだけ本物志向で創り込んだのである。

百聞は一見に如かずというように、本物を知らずしてイメージは膨らまない。TDSにはS.S. コロンビア号という巨大客船を模した建物があるが、計画時に私は「大き過ぎる」と反対した。しかし、ディズニー社は「これが本物だ」と譲らなかった。いざ創ってみると圧巻の一言。今やこのスケールのS.S. コロンビア号なくしてTDSは語れない。

「金はいくらかけてもいい、本物を創ってほしい」——1983年の東京ディズニーランド開業に全身全霊をかけた二代目社長の高橋政知が、その建設時に繰り返した言葉だ。当初1,000億円を予定していた総事業費は、1,800億円を超えた。しかし、本物を徹底追求し、妥協しなかった過程を経たからこそ、今の当社がある。

さまざまなエピソードに思いをはせ、初心を胸に刻み直したノルウェー訪問となった。